The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東京下町方言話者のスタイル切換え
Author(s)	松丸, 真大; 辻, 加代子
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2002, 4, p. 33-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第4号（2002年3月）33-54

東京下町方言話者のスタイル切換え

松丸 真大・辻 加代子

1. 調査の概要

1.1. インフォーマント情報

〔表1〕

	年齢	職業	居住歴
SA	70	元寿司職人・乾物屋	0-60：東京都中央区　60-：千葉県柏市
SC	85	元呉服屋・現ビルオーナー	0-：東京都中央区（兵役5年があるが地域は不明）
YA	21	寿司職人	0-：東京都中央区
YC	21	学生	0-1：福島県福島市　1-：東京都中央区
YF	28	学生	0-15：京都市左京区　15-23：東京都江戸川区 23-：大阪府池田市

1.2. 談話情報

〔表2〕

	話者	話者間の関係	収録時間	談話の展開
老－老*1	SA－SC	親しい同年代	32分	SCが多く発話
老－若	SA－YA	祖父と孫	30分	YAが質問、SAが答える
老－調*1	SA－YF	初対面	28分	YFが質問、SAが答える
若－若	YA－YC	親しい同年代	38分	同程度の発話量
若－調	YA－YF	初対面	28分	YFが質問、YAが答える

*1 SAよりもSCが年上であるせいか、SAは「老－老」で丁寧体を用いる。逆に「老－調」では、（場面設定の意図に反して）さほど改まっていない。この点で、当該方言の資料は他地域の資料と異なる。

2. 結果および考察

2.1. 自称詞

2.1.1. 結果

〔表3*1〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ワタシ系*2	10	-	8	-	-	-
ボク系	-	-	-	-	2	18
オレ系	-	8	14	52	4	9
ジージ*3	-	4	-	-	-	-

*1 一人称複数（アタシラ・ボクラ・オレラ）を含む。また他人の発話を直接引用したものは、対象としていない。
*2 アタシ・アダシを含む。
*3 代名詞ではないが、自分に言及する際に用いる語として含めた。

（1） SAはワタシ系vs.オレ系、YAはボク系vs.オレ系の2系統で切換えを行なっている。

(2) 切換えはSA・YAともに連続的な切換えである。SAでは《対老》＞《対調》＞《対若》の順でワタシ系の割合が高く、YAでは《対調》＞《対老》＞《対若》の順でボク系の割合が高い。

2.1.2. 解釈

(a) SAは《対老》でワタシ系を、《対若》ではオレ系を専用している。両形式を用いている《対調》に注目してみると、SAがワタシ系を用いるのは以下の環境に限られている。（ｉ）談話の冒頭（3例）、（ii）話題の変わり目（2例）、（iii）「子供の頃」と共起する場合（3例）。談話の中でワタシ系（○）とオレ系（◆）が現れる順序を示すと〔図1〕のようになる。「｜」は話題の切れ目、「◎」は（iii）のワタシ系を表す。

〔図1〕

○◆○◆◆◆◆◆◆◆◆○｜◆◆｜○◆◎◎｜◆｜◎◆

以下に（ii）の例を示す。

〔1〕

119YF:し、や 話 変わるんですけども、(SA:うん) 新富町って やっぱり 昔は 下町だったんですか

120SA:うん

121YF:あの一 言葉も したま、ち ぽかったんですか

→122SA:そーねー 別に一一、下町一、とか 山の手とかっての わかんないもんなー 私は、

〔老ー調〕

（ｉ、ii）は「調査」という場面を意識する部分である。ここから、自身の発話に注意が向いた時（モニターがかかった時）にワタシ系が現れてくるものと考えられる。

(b) (2)の結果と(a)の解釈を併せて考えると、SAは《対老》＞《対調》＞《対若》の順で、自身の発話により注意を向けていることがわかる。

(c) SAのオレ系形式に注目すると、《対老》では使用されない。ここから、連続的な切換えではあるものの、《対老》と《対調》《対若》との間には大きな隔たりがあることがわかる。話し相手が自分より年上か否かがSAの切換えに大きく関わっていると考えられる（〔表1〕参照）。

(d) SAの切換えは、発話の注意度によって説明できる（図2）。注意度には、(1)相手の属性（年齢；ドメイン）が最も強く関わっており、次に(2)改まり意識（調査場面への注意；ドメイン内）が関わっていると考えられる。

〔図2〕

低←――――――注意度――――――→高

オレ系　　ワタシ系

(e) 同一ドメイン内において YA が使用する形式の分布は、1 形式が連続して現れる傾向にある。〔図 3〕に《対調》におけるオレ系（◆）とボク系（○）の分布を示した。

〔図 3〕

◆○ | ○○○○○○ | ○◆ | ◆○ | ○ | ○○◆ | ○○ | ○○◆ | ◆◆ | ○○◆

上図から (1) ボク系が現れるとその後続いて使用される、(2) 切換えは話題の切れ目と一致せず、話題の切れ目の前で行なわれる、の 2 点が分かる。この談話では、切換えが話題の終結を予測させる機能を担っていることが予想される。

(f) (2) の結果から、YA の切換えは親疎を基準として行なわれると考えられる。

(g) SA・YA の切換えは共に話題と関わる可能性があるが、その場合、SA はワタシ系を用いることが目標であるのに対して、YA は切換える事自体が目標となる（どの形式に切換えるかは重要ではない）。

(h) SA のワタシ系と YA のボク系は言語変化を反映したものではないと考えられる。ワタシ系は、社会の中で成長する過程で習得されるものであろう。

2.2. 対称詞

2.2.1. 結果

〔表 4〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
アナタ	-	-	-	2	-	-
オマエ系*2	-	3	-	3	-	-
名前*1	-	-	-	8	-	-
親族名称*1	-	-	-	-	9	-

*1 代名詞ではないが、相手に言及する際に用いる形式として含めた。
*2 オメー・オマを含む。

(1) SA は《対若》でオマエ系、《対老》《対調》で相手を指す語を用いないというカテゴリカルな切換えを行なっている。

(2) YA は《対若》でアナタ・オマエ系・名前、《対老》では親族名称（ジージ）、《対調》では対称詞を用いないというカテゴリカルな切換えを行なっている。

2.2.2. 解釈

(a) 相手に言及する語を用いるか否かに着目すると、SA・YA ともに改まった場面でそのような語が現れない（SA が《対老》を改まったものととらえていることについては § 1.2.を参照）。なるべく相手に言及しないことによって、改まりを示す（くだけた感じを無くす）ストラテジーであると考えられる。

(b) SA・YA の切換えには 2 段階のプロセスが働いていると考えられる。まず（ｉ）相手に言及する語を用いる／用いないを決める段階、そして（ii）用いるとするなら

ばどのような形式を用いるかを選択する段階、である（〔図 4〕参照)。

〔図 4〕

- 用いない
- 用いる
  - アナタ・オマエ
  - 名前

このうち、(1) の段階の切換えは当該方言話者（そして他方言話者も）が共有しているものであろう。これは、SA・YA 共に改まった場面で対称詞を用いないことからうかがえる。それに対して (2) の段階の切換えは、個人が話し相手と共有する規範に基づいて行なわれるため、バリエーションが見られることが予想される。YA が《対老》で親族名称のみを用いるのに対して、《対若》では複数形式を用いるのは、相手と共有する規範の強さが大きく関わっていると考えられる（ただし (c) も参照)。

(c) YA は《対若》でアナタ・オマエ系・名前という複数の形式で YC に言及しているが、SA に対しては親族名称だけを用いている。他地域の若年層話者にも同様の傾向が見られることから（高知県幡多方言（髙木担当）を参照)、方言普遍的な現象と考えられる。

(d) YA が《対若》で「オマエ系」を用いる場合、呼びかけ語的な意味で用いられており、それを省略しても文は成り立つ（談話例参照)。

〔2〕 36YA: なんで いーんだよー。おまぇ 今の 彼女に 失礼だよ。 〔若ー若〕

発話にこのような語を挿入することによって、相手がウチに属する人間であることを示していると思われる。なお、SA の「オマエ系」も同様の現れ方を見せる。

2.3. 原因・理由

2.3.1. 結果

〔表 5 接続助詞〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ンデ*1	-	2	4	1	-	17
カラ	16	31	21	29	5	24

*1 「今度 大学 行きたいな ってゅんで」のように「〜コトデ」で置き換えられるンデは除外した。

〔表 6 接続詞〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ダカラ系*1	16	36	33	9	7	14

*1 ダカァ・ダカー・ダカ・ダーを含む。

(1) YA は《対調》においてンデを多く使用する。接続助詞が切換えの対象となっていることがわかる。

(2) SA が使用する接続助詞ンデの割合は場面間でさほど変わらない。つまり切換えの対象とはなっていない。

(3) 接続詞では、ノデに対応する形式ナノデ・ナンデが現れず、ダカラ系形式が専用される。

2.3.2. 解釈

(a) YA が《対調》で用いるンデは、ほとんど（13 / 17 例）が以下の例のような中途終了発話文である。

〔3〕

272YA: いや やっぱ、遊ぶ とこが 無い。（YF:あー） やっぱ 遊ぶのが 好きなんで、
スポーツ したいんで、（YF:あー なるほど） はい、だー[だから] い、
しょーがっこん 時 家に 帰るまで 鬼ごっこでしたからね、…（以下略） 〔若ー調〕

文を最後まで言い切らないことによって含みを持たせる構造（中途終了発話文）と普段用いない形式（ンデ）を同時に用いることによって、効果的に丁寧さを表しているものと考えられる（意識的に行なっているのかは不明）。「〈前件〉（ナ）ンデ、〈後件〉」のような構造で用いられるのが少ないことから、この形式は原因・理由を表すよりは、丁寧さを表すことを目的として用いられていると予想される。なお、《対若》で現れるンデも中途終了発話文で用いられている。

(b) また YA のンデはほとんど（15 / 17 例）が状態性の述語に続く。動作性の述語であっても、習慣的動作を表すものに接続している。逆にカラにはそのような制約が見られない（動詞が多いが）。(a) で述べた丁寧さだけでは、この分布を説明することはできない。切換えに文法的な制約が働く可能性がある。もし、制約があるとすれば、

状態性述語 ＞ 動作性述語 （習慣動作 etc. ＞ 1 回きりの動作？）

のような階層関係を見せることが予想される。しかし、なぜこのような階層関係が成り立つのかは不明である。

(c) SA の用いるンデは全て「形式名詞ノ＋接続助詞デ」と解釈することも可能である（〔4〕参照；3 段目のンデは典型的な「ノ＋デ」の例）。

〔4〕

50SA: うん。それを、そこの 会社でもって その、んー ＊＊ 講習が あって、（YF:はい）
→ セルフサービスを 勉強しませんか ってゅんで 俺ぁ、参加して、（YF:へーーーー）
あ なるほど これは いーなー ってゅんでー、それを 取り入れたの。 〔老ー調〕

したがって、SA は原因・理由の接続助詞としてカラしか用いないという可能性も考えられる。いずれにしても、SA のンデ／カラは切換えの対象となっていない言語項目である。

2.4. 逆接

2.4.1. 結果

〔表 7　接続助詞〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ケレドモ	-	1	1	-	-	-
ケドモ	2	1	1	-	-	1
ケド	10	20	20	47	11	56

〔表 8　接続詞*1*2〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ダケド	3	6	4	-	-	-
デモ	8	6	4	34	9	18

*1　SA の《対若》で「ソレデモ・ホンデモ」という形式が見られたが、「ダケド」（接続詞）と意味がずれるために除外した。

*2　YA《対若》において、下例のような「ケド」が 1 例見られたが、自分の発話した言語形式について言及するメタ言語的発話であるために、対象から除外した。

〔5〕

528YA: でも けっこーさ 女の人っ とかって ビー、あの 血液型 気にするじゃん。俺も 気に
→　すんだけどね？〔笑い〕
529YC: どーゆーこと？ それ。
530YA: いや 女の人ってさー そーゆーの、好きじゃん。血液型で 相性が いーとかさ。俺も 好きなのね、ちなみに。〔笑い〕
531YC: 〔笑い〕 全然、だからー、それは 流れ的に おかしーはずだよ。
532YA: あー、おかしーけどー、
533YC: でも 俺は 嫌いだよ ってゆーのが 普通じゃん。
→534YA: あーー、「けど」 じゃないよ そしたら、（YC:うん） ま でも 彼女は …（以下略）

〔若－若〕

2.4.2. 解釈

(a) SA の場合、《対老》で接続詞ダケドの割合が若干低くなる。これを切換えと考えるならば、ダケドがぞんざいな形式としてとらえられている可能性がある。ただし、全般的に接続助詞・接続詞ともに場面による形式の偏りは小さい。

(b) YA の場合、《対調》のケドモ以外は一貫して接続助詞＝ケド、接続詞＝デモという結果である。ケドモとケドが切換えられていると考えるならば、ケドモが丁寧な形式ととらえられているのであろう。しかし数の点から考えても、この可能性は低い。

(c) 逆接の形式は、SA の時点で複数あったものが、YA になるとほぼ 1 形式となる。これはおそらく当該方言における言語変化を反映したものであろう。切換えが言語変化（形式交替）過程の途中で見られる現象と考えるならば、SA の時点で既に変化の最終段階に入っている逆接形式が切換えの対象とならないことは、むしろ当然であろう。

2.5. 縮約形

2.5.1. 結果

〔表 9*1〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
～テル／デル	17	45	36	61	22	39
～チャウ／ジャウ	5	23	16	19	4	6
～テク／デク	-	4	3	3	2	2

*1 いずれの項目も「～テル」のような言い切り形の他に「～テナイ・～テタ・～テッ（ケド）」という活用形・（音韻的）変異形を含む。

（1） SA・YA 共に非縮約形が現れることはない。

2.5.2. 解釈

(a) （1）の結果から、縮約／非縮約は切換えの指標とはなっていないと考えられる。

2.6. 否定条件形

2.6.1. 結果

〔表 10*1〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ナケリャ	-	1	1	-	-	-
ナキャ	2	1	3	3	2	-
ナイト	1	-	-	3	-	5
ネート	-	-	-	1	-	-

*1 「行かなきゃ（いけない）」のような当為表現の「なきゃ」にあたる形式を採用した。その他の表現は 4 形式が置き換え可能ではないため、採用していない。

（1） SA は《対老》でナケリャを用いず、代わりにナイトを用いる。

（2） YA は《対調》でナイト、《対老》でナキャを用いる。

2.6.2. 解釈

(a) 切換えが起こっているとするならば、（1）の結果から、SA はナケリャとナイトを切換えの対象としていることになる（ナケリャが抑制されるのか、ナイトが積極的に用いられるのかは不明）。（2）の結果から、YA はナイトとナキャの対立であろう。どちらも改まった場面でナイトを用いるように見えるが、サンプル数を増やして再検討する必要がある。

(b) YA は「いけない」にあたる形式が後続しない場合にナイト・ネートを用いる傾向にある。この点から、否定条件形の現れ方は、切換えではなく形態素連鎖の点から説明すべきかもしれない。

(c) ナケリャ・ナキャをバ系列、ナイト・ネートをト系列としてまとめてみると、SA がバ系列を主に使用するのに対して、YA はト系列の使用が増えてきている。これが言語変化の現れであるならば、SA と YA の中間（中年層）を調査することによって、切換えの様相を見ることができるかもしれない。

2.7. 否定

2.7.1. 結果

〔表 11〕 *1

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ナイ	20	64	53	82	14	89
ネー	-	3	3	14	-	-

*1 「アブナイ・ショーガナイ・シカタナイ」など、肯定との対立を持たない「ナイ・ネー」は採用していない。

(1) SA・YA ともに、年齢が上の相手に対してはネーを用いない。

2.7.2. 解釈

(a) 切換えの基準として、（ｉ）年上の相手との談話ではネーを用いることができない、（ii）年上ではない相手との談話でネーを用いるべき／ナイを用いるべきではない、の 2 通りが考えられる。ネーが現れる談話においても、その数がナイよりもはるかに少ないことから、これらの談話でもナイが基本であると考える方が妥当であろう。すなわち、SA の《対若》《対調》、YA の《対若》ではネーの使用が許されており、逆に SA の《対老》、YA の《対老》《対調》ではネーの使用が許されていないのである（ｉの基準)。ここから、当該方言のネーは、ぞんざいさを伴う形式としてとらえられているものと考えられる。

(b) SA のネーは、（ｉ）独話（またはそれに近い発話)、（ii）過去の心内発話、に多い。話し相手から切り離されたところ（すなわち、聞き手に対する待遇を考慮しなくてもよいところ）に現れるという点は、ネーがぞんざいさを伴うことと関係していると思われる（(a) 参照)。

(c) SA のネーは、談話の後半部分に多く現れる。これは、発話への注意度が低くなった段階でネーが現れると解釈できる。すなわち、ナイが基本（規範）の形式であり、ネーの使用には、(聞き手への配慮など）注意が必要であることを示唆する。

(d) 以上 (b) (c) の傾向は SA の談話に特有であり、YA の談話においては見られない。

2.8. ではないか

2.8.1. 結果

〔表 12　ではないかⅠ類*1〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ジャナイ（デ）スカ	1	-	-	-	-	21
ジャナイカ	-	4	1	-	-	-
ジャナイ	-	7	10	2	-	1
ジャネーカ	-	-	1	-	-	-
ジャン	-	-	-	22	2	-

〔表 13　ではないかⅡ類*1〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ジャナイ（デ）スカ	1	-	-	-	-	3
ジャナイカ		1	1	-	-	-
ジャナイ	-	-	-	5	-	-

*1　田野村（1988）を参考に、「ではないかⅠ類」と「ではないかⅡ類」を分類した。以下に大まかな違いをあげておく。

ではないかⅠ類：　用言・体言のどちらにも接続する
形態的な自由度が低い（「ない」を「なかった」に置き換えられないなど）
「発見した事態を驚き等の感情を込めて表現したり、ある事柄を認識するよう相手に求めたりするもの」（田野村 1988：122）

ではないかⅡ類：　体言相当のものに接続する
形態的な自由度が高い
「推定を表現する」（田野村 1988：122）

(1) SA・YA 共にジャナイデスカを改まった場面で用い、その他の場面では他形式を用いる。

(2) SA の「ではないか」形式自体の出現数（総数）は、《対調》＞《対若》＞《対老》の順で少なくなっていく。

(3) YA の「ではないか」形式自体の出現数は《対若》＞《対調》＞《対老》の順である。

(4) SA はジャナイをではないかⅠ類の意味でしか用いない。

(5) YA はジャンをではないかⅠ類の意味でしか用いない。

2.8.2. 解釈

(a) SA は「ではないかⅡ類」の意味でジャナイデスカとジャナイカの 2 形式による切換えを行ない、「ではないかⅠ類」の意味ではジャナイデスカ、ジャナイカ、ジャナイの 3 形式による切換えを行っていることがわかる。また（1）の結果から、SA はカテゴリカルな切換えを行なっていることがわかる。丁寧形式の対立を考えないならば、ジャナイカ系（ジャナイデスカ・ジャナイカ）はどの場面にも現れるのに対して、ジャナイが《対老》に現れることはないということできる。この分布は否定ネ

ー（2.7.）や間投助詞サー（2.12.）と同じであり、ジャナイにぞんざいさが伴っていると解釈することができる。

(b) 〔表 12〕〔表 13〕から YA は、「ではないかⅡ類」の意味でジャナイデスカとジャナイの 2 形式による切換えを行ない、「ではないかⅠ類」の意味でジャナイデスカ、ジャナイ、ジャンの 3 形式による切換えを行なっていることがわかる。また、ジャンは《対調》に現れないということがわかる。(a) と同様に考えるならば、ジャンにはぞんざいさが伴うととらえられている可能性がある。

(c) SA・YA 共に、「ではないかⅡ類」ではバリエーションの数が少なく、「ではないかⅠ類」では多い（Ⅱ類の出現数が少ないため定かではないが）。また、「ではないかⅡ類」における切換えは、基本的に丁寧形式の切換えである。Ⅱ類の出現数が少ないことも考えると、この意味にあたる表現では、ではないか形式とそれ以外の形式（例えばダロー）との間で切換えを行なっている可能性がある。「ではないか」に相当する形式という、形式からのアプローチではなく、「不確かさ」を表す表現という、意味からのアプローチを行なう必要があろう。

(d) SA・YA 共に、音声的に短い／融合した形式（すなわち、より文法化が進んだ形式）がフォーマルな場面に現れないという共通点がみられる。文法化形式が低いスタイルから話者の体系に現れることがわかる。

(e) 言語変化の点から考えるならば、(a) (b) から SA はジャナイカ：ジャナイ、YA はジャナイ：ジャンのように文法化した形式が低いスタイルに入り、高いスタイルにあった形式が体系から消えていくことがわかる。ただし、低いスタイルにおける文法化形式の出現がジャナイカの消失の引き金になっているか否かは定かではない。また、(c) から、この変化はⅠ類に早く進み、Ⅱ類にはまだ進んでいない（もしくは、Ⅱ類には起こらない）ことがわかる。

2.9. ガ格

2.9.1. 結果

〔表 14[*1]〕

	老（SA）						若（YA）					
	対老		対若		対調		対若		対老		対調	
ガ	31	(83.8)	58	(96.7)	90	(96.8)	52	(72.2)	14	(63.6)	46	(79.3)
φ	6	(16.2)	2	(3.3)	3	(3.2)	20	(27.8)	8	(36.4)	12	(20.7)

*1 「水φ 飲みたい」のようにガ格／ヲ格両方に解釈できるものは除外した。

(1) SA では《対老》＞《対若》《対調》の順でφの出現数が多い。

(2) YA では《対老》＞《対若》＞《対調》の順でφの出現数が多い。

2.9.2. 解釈

(a) (1) の結果から、SA が切換えているとするならば、その対立は《対若》《対調》vs.《対老》という切換えになる。これまでの結果（2.2.対称詞など）から、SA が《対老》を改まった場面としてとらえていることがわかる。このように考えると、SA の切換えは（ｉ）改まった場面でガの出現が抑制される、もしくは（ii）くだけた場面でガの使用が求められるという 2 つの解釈が可能である。ガは動詞と名詞の文法的関係を示す標識であるが、くだけた場面でこれを明示するメカニズムが働いているとは考えにくい。したがって、ここでは（ｉ）の解釈をとっておく。格の明示を避けることによって、改まりを示すものであろうか。

(b) YA の場合、(2) の順序は場面の改まりの順序ではない。したがって、(もし切換えているとするならば) SA と同じメカニズムで切換えを行なっているとは言えない。〔表 14〕の数値をみると、《対若》《対調》と《対老》との間で値に開きがあるように見える。ここから切換えの基準を推測するならば、親族（SA）vs.非親族（YC・YF）といったものであろうか。ただし、切換えの基準が SA と異なること、また、他項目における YA の切換え基準とも異なることを考えると、切換えの対象とはなっていない可能性もある。

(c) SA・YA 共に、φが出現するのは述語が 1 項の場合（SA : 10 / 11 例、YA : 36 / 40 例；ほとんどが形容詞述語）である。ここから、切換えには「述語が 1 項述語であること」という文法的な制約条件が働いていることがわかる。

(d) 以上の解釈は、*2 に記した基準により得られた結果をもとにしている。今後、「は」や無助詞の機能なども含めて考察する必要があろう。

2.10. ヲ格

2.10.1. 結果

〔表 15*1〕

	老（SA）						若（YA）					
	対老		対若		対調		対若		対老		対調	
ヲ	7	(43.8)	30	(68.1)	42	(70.0)	9	(40.9)	8	(42.1)	5	(26.3)
φ	9	(56.2)	14	(31.9)	18	(30.0)	13	(59.1)	11	(57.9)	14	(73.7)

*1 「(ワープロで) ぶんしょー　書く」のように「文書を」「文章」の両方に解釈できるもの（母音オで終わるもの）は対象としていない。ただし、はっきりと助詞の「を」を発音しているものは採用した。

(1) SA の場合、《対老》＞《対若》《対調》の順でφの出現が多い。

(2) YA の場合、《対調》＞《対若》＞《対老》の順でφの出現が多い。

2.10.2. 解釈

(a) (1) の結果はガ格（2.9.）の結果と同じである。ここから、もし SA が切換えている

とするならば、ガ格・ヲ格は同じメカニズムで切換えられると予想される。

(b) これに対して YA の結果 (2) は、ガ格の傾向と全く逆である。結果から考えれば、SA の場合のようにヲ格の明示を避けることによって改まりを示すという解釈もできるが、これは ad hoc な説明でしかない。いずれにしても、YA の場合はガ格とヲ格で切換えに同じメカニズムが働いているとは考えられない。

(c) 統語的な形式分布をみると、ガ格の場合大半のφが 1 項述語に現れることから、ガ格とヲ格のφが同一文中に現れる可能性はほとんどない。2 項述語でガ格φが現れる例では、ヲ格名詞が出現しない（文脈から復元可能なため；下例参照）。

〔6〕

58SA:うん、(YF:へーー) だいち[第一] レ、レジが しとつ[1つ] あればさー、極端な 話ね？

→ (YF:はい) レジに 1人 いれば、あの お客さんφ 勝手に こー 持ってくるんだよね。

〔老ー調〕

2.11. 方向格

2.11.1. 結果

〔表 16〕

	老 (SA)			若 (YA)		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ニ	3 (27.3)	-	7 (21.9)	5 (41.7)	3 (50.0)	6 (40.0)
エ	3 (27.3)	2 (14.3)	19 (59.4)	1 (8.3)	-	-
φ	5 (45.4)	12 (85.7)	6 (18.7)	6 (50.0)	3 (50.0)	9 (60.0)

2.11.2. 解釈

(a) 出現数が少ないため定かではないが、SA・YA 共に方向格は切換えの対象となっていないようである。

2.12. 間投助詞

2.12.1. 結果

〔表 17*1*2〕

	老 (SA)			若 (YA)		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
ネ (ー)	50	43	41	57	7	53
サ (ー)	-	9	6	11	3	-

*1 以下の形式に後続するものを間投助詞として認定した。
接続助詞・接続詞・副詞・副助詞（は・も）・格助詞・テ形・テユーカ
はだかの名詞は「ダ」を補っても意味が変わらないものを終助詞として、「ダ」を補うと意味が変わるものを間投助詞として扱った。

*2 「マー」という形式は「ネ」としか共起しないため除外した。

(1) SA の場合、《対老》でサーが現れないのに対して《対若》《対調》では現れる。

(2) YA の場合、《対調》でサーが現れないのに対して《対若》《対老》では現れる。

(3) いずれの場合でも、サーの出現数はネーのそれよりも少ない。

2.12.2. 解釈

(a) (1) (2) から、形式の分布は否定形式 (2.7.参照) のものと似ていることがわかる。ただし、間投助詞の場合には、YA の《対老》でサーが現れる点で異なっている。分布の類似性から、否定での解釈と平行的に考えると、サーはフォーマル (と話者が意識する) 場面では用いることができず、したがってぞんざいさを伴う形式としてとらえられていると解釈することができる。

(b) サーには丁寧形式と共起する例がみられない。これは (a) で述べたようにサーがぞんざいさを伴うことと関連していると考えられる。

(c) SA の《対調》、YA の《対老》におけるサーは談話の後半部分に現れる。この 2 つの場面は改まりの点では中間に位置する場面である。談話の冒頭部分ではある程度のモニターが働くが、談話が進行するにつれて注意度が下がった結果、現れたものと解釈することができる (2.7.と同様の解釈)。

2.13. 丁寧体 －デス・マス形式－

2.13.1. 結果

〔表 18 デス*1〕

	老 (SA)						若 (YA)					
	対老		対若		対調		対若		対老		対調	
デス*2	39	(60.0)	10	(4.9)	11	(7.9)	21	(7.4)	9	(7.9)	146	(54.3)
ス*3	7	(10.8)		-	1	(0.7)	1	(0.4)		-	91	(33.8)
ダ・φ*4	19	(29.2)	194	(95.1)	128	(91.4)	261	(92.2)	105	(92.1)	32	(11.9)

*1 デス、ダ・φともに引用節内の語はすべて除外した。

*2 非過去形・過去形・推量形を含む。また、[d] が弱化したェスのような形式も含む。

*3 菊池 (1995) などでは「あるッス」のように動詞終止形に接続するスの存在が指摘されているが、今回の資料には形容詞・名詞に接続するものしか見あたらなかった。したがって、ここではスをデスの (音声的) 変異形として扱い、デスの対立項とする。ただし、今後の調査で終止形接続のスが見つかった場合には、丁寧体 (デス・マス形式) 全体と対立する「中間丁寧体」として扱う必要があろう。

*4 形容詞・形容詞型活用をする助動詞・指定辞ダ・ノダ・確認要求のジャナイ等の述語、動詞推量形および述部にたつ単独の名詞・名詞句を集計した。ただし、以下の場合集計から除外した。
1) 名詞・形式名詞が後続する場合、2) 終助詞 (類)「サ」「ジャン」「ヤ (詠嘆)」等が後続する場合、3) 接続助詞「ナラ」が後続する場合、4) あいづち (反復系・ソーデスカ系)、聞き返し、5) 融合形「ッテュ」(＝という) などに前接する形容詞・名詞述語、「ッテュー」、「ツンダ」(＝て言うんだ) などの融合形自体

〔表 19 マス*1〕

	老 (SA)						若 (YA)					
	対老		対若		対調		対若		対老		対調	
シマス*2	15	(21.1)	1	(0.6)		-	4	(1.7)		-	69	(50.0)
スル*3	56	(78.9)	164	(99.4)	218	(100)	230	(98.3)	47	(100)	69	(50.0)

*1 シマス、スルともに引用節内の語はすべて除外した。

*2 非過去形・過去形を含む。
*3 動詞・動詞型活用をする助動詞（否定形を含む）、形容詞「ナイ」、「カモシレナイ」を集計した。ただし、以下の場合集計から除外した。
1）推量形、2）形式名詞（「ノ」「トキ」以外）が後続する場合、3）終助詞（類）「サ」「ジャン」「ヤ（詠嘆）」等が後続する場合、4）接続助詞「バ」が後続する場合、5）あいづち（反復系・ソーデスカ系）、聞き返し、6）融合形「キャ」（＝～ば）、「ッテュ」（＝という）などに前接する形容詞・名詞述語、「ッテュー」、「ツンダ」（＝て言うんだ））などの融合形自体、7）南（1974；1993）A類従属句内にくる場合

(1) SA は《対老》で、YA は《対調》で（スを含む）デス・マス（以下、丁寧形式とよぶ）の使用率が高くなる。

(2) SA のデス／ス／ダ切換えは、デス・スが《対老》で 70%、《対若》《対調》でほとんどあらわれず、《対老》でデス／ダの数値が逆転することがわかる。これに対して、シマス／スルの切換えは、シマスの使用が《対老》でも 21%にとどまっており、シマスの数値がスルのものを上回ることはない。

(3) YA の場合も同様に、デス・スの割合が《対調》でダ・φのそれを上回るのに対して、シマスの割合は、《対調》でもスルと同じである。

(4) SA の《対若》《対調》、YA の《対若》《対老》に見られるデスは、ほとんどが確認要求用法のデショである（2.14.参照）。

(5) SA の《対若》《対調》、YA の《対若》《対老》に見られるシマスも、「では　始めます」のように談話の開始部や終結部に現れる定型表現である。

2.13.2. 解釈

(a) (1) の結果から、丁寧体と普通体の 2 項による切換えを行っている。切換えには初対面などつきあいの長さ、すなわち親疎の要素はあまり関与せず、むしろ、相手の年齢ないし社会的地位などの要素が関与していると思われる。また、ッスは丁寧体を使う相手との談話に、時折使用し心理的距離を縮めるなど、微調整を図っているといえよう。

(b) YA の普通体／丁寧体切換えは、初対面の《対調》と他の二場面とで分かれ親疎による切換えを行っていると解釈される。上位場面である《対調》場面で使用される形式は丁寧体、ッス、普通体で、ッスを多用するという点で SA とは異なっている。ッスの使用は話し相手との年齢差が少ないことによるアコモデーションなのか、YA のスタイルなのか結果からは明言できない。普通体が基調の 2 場面はさらに身内と他人でわずかに切換えが行われているといえよう。

(c) 興味深いのは、(2) (3) の結果である。この結果から、普通体／丁寧体の切換えはデス・スへの切換えが優先され、シマスへの切換えはデス・スほど機能していないと考えられる。おそらく、デスがほとんど形態変化を行なわないのに対して、シマスは複雑な形態変化を行なうことが、要因の一つと考えられる。

2.14. 丁寧体 －推量形式－

2.14.1. 結果

〔表 20 確認要求用法〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デショ（ー）	8	11	12	20	10	-
ッショ	-	-	-	8	-	-
ダロ（ー）	-	2	-	-	-	-

〔表 21 推量用法〕

	老（SA）			若（YA）		
	対老	対若	対調	対若	対老	対調
デショ（ー）	-	-	-	-	-	2
ダロ（ー）	1	1	3	4	-	-

(1) SA の場合、推量用法でダローのみを用いる。確認要求用法では《対若》でのみダローが現れる。

(2) YA の場合、確認要求用法でデショ系のみを用いる。推量用法ではダローとデショーをカテゴリカルに切換える。

(3) ッショという形式は確認要求用法にしか現れない。「ではないか」(2.8.) のジャンと同じ分布である。

2.14.2. 解釈

(a) (1) の結果から SA のダローはぞんざいさを伴う形式ととらえられていることが予想される。

(b) (2) の結果から、確認要求用法ではダローという形式が用いられなくなってきていることが予想される。YA の《対老》、SA の《対若》ではッショの使用がみられない。これは丁寧体のスでも同様である（〔表 18〕参照)。ス・ッショともに身内には使用しにくい形式と言える。

(c) SA・YA ともに確認要求用法ではデショ（ー）が主に用いられる。2.13.の結果もあわせて考えるならば、SA・YA の体系では下図のように確認要求では待遇レベルが 1 段階高い形式が用いられることがわかる。

〔図 5〕

SA

	言い切り	確認要求
《対老》	デス・ス	デショ
《対調》	ス・ダ	デショ
《対若》	ダ	デショ・ダロ

YA

	言い切り	確認要求
《対調》	デス・ス	デショ
《対老》	ダ	デショ
《対若》	ダ	ショ・デショ

3. まとめ

(a) 以上 14 項目の結果から、SA・YA 共に自称詞、対称詞、否定、ではないか、間投助詞、丁寧形式の 7 項目で比較的はっきりとした切換えが見られることがわかった。またガ格、ヲ格においては、はっきりとした傾向は見られないものの、場面間の形式の出現に違いが見られた。

(b) はっきりと切換えが見られる項目は、次の 2 種類に分けられると考えられる。すなわち、改まった場面である形式を用いることが望ましいタイプ（仮に「義務型切換え」と呼んでおく）と、改まった場面で用いることが望ましくないタイプ（仮に「禁止型切換え」と呼んでおく）の 2 種類である。義務型切換えには対称詞・丁寧形式などがあたり、禁止型切換えには自称詞・否定・間投助詞などの項目があたる。

(c) この 2 種類の切換えとドメイン（場面）の関係をみてみると、義務型切換えは場面間で 2 形式（あるいはそれ以上）の出現数が逆転し、カテゴリカルな切換えに近い分布を見せるが（2.2.、2.13.）、禁止型切換えの場合は数が逆転することはなく、どの場面でも一方の形式が主に用いられる（2.7.、2.12.）。

(d) 同一ドメイン内では、禁止型切換えが起こる談話内の位置には特徴があり、談話の後半部分に現れることが多い（2.1.、2.7.、2.12.）。これは注意度と関連しており、注意度が低くなることによって望ましくない形式の出現を抑制する力が弱くなるためと考えられる。

(e) 禁止型切換えの項目において望ましくない形式が現れる頻度・場面から、その形式にかかる制約の強さを推測すると、自称詞＞否定＞間投助詞・ではないかの順で切換えに強い制約がかかることがわかる。また、義務型切換えでは対称詞＞丁寧形式の順で形式の使用に制約（義務）が働く。以上の順序は、どちらも語彙項目＞文法項目の順であり、切換えにおいて語彙項目が優先されることがわかる。

(f) 義務型切換えにあたる項目をみてみると、いずれも聞き手の待遇に関わるものである。対して禁止型切換えが見られるのは、基本的に聞き手待遇とは関わらないものである。ここから、（文法・語彙を含む）聞き手に対する待遇に関わる項目の切換えは、他の形式の切換えとは異なるメカニズムを持つと考えられる（具体的な違いは上述のとおり）。

(g) 以上の切換え項目は、改まった場面である形式を用いる／用いないというように、場面間の差異が比較的はっきりしている。これに対して、ガ格、ヲ格は場面間の出現が連続的である。おそらく、切換えられる形式間の差異を話者が意識できるか否かが関わっていると考えられる。

(h) SA の切換えは基本的に相手の年齢が自分よりも上か下かを基準としている。ただし、対称詞では相手が親族か否かという軸も加わり、より制約された切換えが見られる。対して YA の切換えは、初対面か否かを基本的な基準として行なわれる。ただし、自

称詞・否定では、相手が年上か否かという軸も加わる。以上のように、SA と YA では、基本とする切換えの基準が異なるが、どちらも「年齢」「親族関係」を基準としていることがわかる。

(i) (h) で切換えの基準が増える項目は、(e) で述べた階層関係の上位に位置する項目と対応する。(e) (h) の 2 点をあわせて考えると、SA は義務型切換えで切換え基準が増えるのに対して、YA は禁止型切換えで切換え基準が増えることがわかる。ここから、SA は望ましい形式を使用すること（義務型切換え）に敏感なのに対して、YA は望ましくない形式を使用すること（禁止型切換え）に敏感であることがうかがえる。

4. 展望

(a) 本稿では主に語彙・文法項目を対象としてスタイル切換えを見てきたが、否定（ナイ／ネー）項目からもわかるように、音声・音韻現象も切換えの対象となっている可能性がある。考えられるものとしては、ガ行鼻濁音、長音短縮、連母音の融合などがある。

(b) 資料には、「すごい←→すっげー」のように、語彙レベルでの切換えが見られることがあった。しかし対象語彙の出現数が少ないため、分析することができなかった。このような語彙の切換えをみるためには、より多くの資料が必要となる。

(c) 今回の資料は場面設定の意図に反して、SA が《対老》で最も改まった発話を行なうというものであった。本プロジェクトでは、東京下町方言の資料をほかにも収集したが、それらの資料にはこのような切換えは見られなかった。したがって、SA の切換えはやや特殊なものとして扱う必要があろう。同一地域で再検証を行なう必要がある。

【参考文献】

田野村忠温（1988）「否定疑問小考」『国語学』152
南不二男（1974）『現代日本語の構造』大修館書店
――――（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

まつまる　みちお　（大阪大学大学院生）
michio_m@d8.dion.ne.jp
つじ　かよこ　（大阪大学大学院生）
ttsuji@athena.ocn.ne.jp

〔老ー老〕

収録日時：2001年7月20日
収録場所：喫茶店
話題：趣味→税金→新富町とその周辺→戦争→SCの怪我→祭り→新富町→芝居

001SA：まいったなー
002SC：や　でもー、えらいですね　今、ねー　パソコン　やって　ダーンス　いーですねー　偉いですねー、んー　いーじゃないすか　ダンス。あれはねー　あのー、若返りと、体のために
003SA：うん　体　使うからね？（SC：えー）あのー、腰を　痛めてたん〈です〉ね？（SC：えー　えー）腰痛で（SC：えー）で　ほんで　ダンス　やると　いーよって　言われて。なるほど　ん　あの治りましたね
004SC：あ　いーですねー（SA：うん）楽しみながら　治すの　一番ですよ。
005SA：そ　だけどー、あんまり　やり過ぎると　桑原さんみたいに、あの　今度
006SC：そ　そ　桑原さん　前にね、柔道　やった、柔道　やってね（SA：うん）だいたい　腰　痛めた〈の〉
007SA：あー　そーなの
008SC：そーなんですよ。（SA：ふーん）柔道がそ、そーなんです。それが、いま、ねー、（SA：うーん）ダンス　やったり、何か　ちょーごーの、（SA：うーん）{笑いながら} ダンス　やったり　するから、（SA：うーん）　なかなか　治りにくいの。
009SA：そーですねー
010SC：今　コルセット　やってますけどねー（SA：うーん）　な　なかなか　治りにくいですよ。だから　そーゆー
011SA：私は　ダンス　やって、（SC：うん）腰が　治ったのに　何でだろーなー　と思って
012SC：や　それぁ　やっぱり　そーゆー、あの　リズムの　あるねー（SA：うん）運動だから（SA：うん）あのー　ラジオ体操や　なんかで　いんじゃないですか？（SA：うーん）ねー　リズムが。でも　もー　きよもとは　や、やめたんですか？
013SA：や　きよもとぁー
014SC：きよ　怒られるけど、きよもとを　やってもねー、歌う　とこが　無いでしょ。
015SA：そーです。きよもとも　そーだし　小唄でも　そーでしょ？
016SC：小唄でもねー（SA：うん）小唄も　私もねー、やめたいんだけど、小池さんが　やってるでしょ、（SA：えーえー）あの　しと　婦人部　ずーっと　ゃったから、（SA：えー）やめる　わけに　いかない。（SA：えー）それでー、やりますけどねー、歌う　とこ　非常に　少ないんですよ。たまにねー、（SA：うん）ゆかたざ　こんなん　あります　ゆかたざらい　と　こーさらい。ねー（SA：うん）ご　5分位　歌って、2万5千円も　越光で　やっと　5万円位　取られたりねー（SA：{笑}）{笑} あんたね
017SA：あたしも　だから　今、あの　小唄　やってますけど（SC：えー）んー　ほんとに
018SC：あ　小唄　あの人に？　あの、
019SA：えー、赤坂さん　とこでね？
020SC：えー　えー、あ　そーですか。
021SA：だけどー
022SC：小唄も　ま　小唄も　いーですよね？（SA：うん）ま　まだ　小唄は　〈いい〉。きよもとは、まだ　きよもとはいんですよねー。
023SA：どーしてか　って　ゆーと　きよもとはねー、京都から　来るからー、（SC：うん）4日間　ぶっ続けで　来る　やるでしょ？
024SC：あの　じほー会館、
025SA：ん　そー　そー、
026SC：じゃない　あそこへ　来てんでしょ？
027SA：じほー会館。
028SC：ねー　りほーかい（SA：えー）そえでねー　前のねー、あのー　新富書院の

〔老ー若〕

収録日時：2001年7月20日
収録場所：喫茶店
話題：YAの職場→YAへのアドバイス→元SAのもとで働いていた職人→SAの習い事→SAの昔

001SA：よろしく、よろしく。{笑い}
002YA：じーじ、決まったの。お寿司屋さん　行くとこ。
003SA：どの辺？
004YA：世田谷区の　榊原。
005SA：して　あのー
006YA：京王線でー（SA：うん）新宿からー（SA：うん）阪大前　ってゆー、ゆ（SA：ふん）の　とこの　近く（SA：ふーん）住み込みで
007SA：うん。何処の　世話？
008YA：へっ？
009SA：ど、誰の　世話？
010YA：えー、何かねー、あのー、マグロ屋さん、吉田さん？
011SA：あー、そー、
012YA：のー　紹介で。
013SA：吉田さん　あー、そーか。
014YA：うん、のー、何か、マグロを　やってる　とこのー、紹介。
015SA：あー　それだったら　わ、いー　寿司屋だ。
016YA：そー。すげー　いー　人だった。
017SA：うん。そーでしょ。
018YA：親元さんが、（SA：ふーーん）あ、9人　いるんだって（SA：うん）雇ってて
019SA：ふーん。じゃ　結構　大きいんだね？
020YA：そーだねー{間}2つ　カウンターがあんの。カウンターのみなんだけど、（SA：うん）カウンターが　2つ　あんのね（SA：うん）前、1つのー、お店〈だ〉ったんだけど、（SA：うん）隣が　空いたから　そこも　買ってー、（SA：うん）穴　あけて、{軽く笑いながら}壁に、（SA：うーーん）そぇで　2つに　しちゃったんだって
021SA：や　かな、かなり　やりてなんだな？
022YA：そーだねー、ちょっと　楽しく　なってき〈た〉。{笑い}
023SA：で、まー　そー、そーゆー　とこへ　行ったら、（YA：はー）いー　とこだけを取り入れるんだよ。
024YA：そーだねー
025SA：ね？　どこにも、欠点　あるしー、ね？自分にー　合わない　所も　あるかもしれないけれどもね？（YA：ふん）うーん、その、それに、その　店の、いー　所を、せーぜー　吸収してくることだよね？
026YA：そーだねー
027SA：うん。そーだよ？　絶対。〈それで〉、全てね？もー　自分の、思うよーになる　なんて、店は　無いから。ねー（YA：うん）うーん　だって　自分のー、親だってー、自分の　思う　よーに　なんないでしょ？（YA：そー）それは　そーなんだよ。で　ましてや、他人様なんだから　そーなんだ。（YA：うん）でも　うちに　いた、あのー、未だに、俺の　時に　いた、（YA：うん）あのー　若いしが、（YA：うん）2人、いるんだけどね？1人は　今ー、銀座の　松寿司にー、
028YA：ふーん、あ、そーなの？
029SA：まつさん　てゆー。名前が　まつさんでもって、今　松寿司に　〈いんだよ〉。
030YA：あっ、そーなの？{笑いながら}
031SA：それからー、川口に　い[る]のもね？（YA：うん）あれも　うちに　20年いたでしょ？　中学を　卒業した　あくる日に　うちに　来たんだよ。（YA：うん）三月　じゅーごんちに。
032YA：すごーい。
033SA：で　20年後の　三月　じゅーごんちに　辞めたんだよ。
034YA：{笑い}あー　そーなの
035SA：うん。で
036YA：すごーいねー。
037SA：それでもって、まー、貰いたいわけじゃ　ないけど、（YA：ふん）お中元、

〔老ー調〕

収録日時：2001年7月20日
収録場所：喫茶店
話題：SAの昔→新富町の開発→新富町の昔→昔の遊び場→新富町の昔→花柳界

001YF：すいません　お願いします。えっとー、じゃ　まず　あのー、お寿司屋さんなんですよねー。昔っからー　お寿司屋さんなんですよねー。(SA：そー。) 何歳ぐらいで　寿司のーー、す　道に　入ったんですか？

002SA：あーー {孫の方を向いて、笑い}

003YF：{笑いながら} 2人で　頼みます　すいません

004SA：{笑い} 恥ずかし　恥ずかしながら、(YF：えー)　私　寿司ぁ　握れないの。

005YF：あー　そーなんですか。

006SA：芸者の　手しか　握れないの。(YF：{笑い}) {笑い}

007YF：{笑いながら} いや　そんなこと　ないです＊

008SA：ほんとだよ。

009YF：{笑いながら} えー　いや　いや　いや

010SA：{笑い} そ　それが　ってーのは、あーあたしがね？中学4年の　時にー、(YF：はい) 父親が　死んだの。(YF：はい) 18歳で。

011YF：はい。でー　そのまま、

012SA：うん　そのまんま、そん時　今、あの孫にも　話　したんだけど、(YF：えー) まずぁ　俺の　じーさんが　いて、(YF：はい) じーさんの　妾が　いて、(YF：はい) お袋が　いて、(YF：はい) 弟が　いて、(YF：はい) その他　店員が　何人か　いて、(YF：はい) ん　総勢　10人ぐらいだねー、(YF：はい) それぉ　あだしが　ほぁ [ほら]、父親が　死んだからって　他へ、サラリーマンでも　何でも、どこへ　どっかへ　働きに　行ったって、食べさして　行かれないぇしょ？ (YF：はい) だかぁ [だから]、やむを得ず、寿司屋を　やったわけ。(YF：はい) ま　まー　寿司屋、寿司屋だけじゃ　ねんだ　そん時に、寿司屋と乾物屋と、食料品やと、(YF：あー　あー　あー) 両方　やってたの。(YF：はい) で、それをー、んー　やって、(YF：はい) ほて [それで]　みんなでもって生活を　してたの。(YF：はーー) いったの。(YF：はい) だから　寿司ぁ　俺握れないの。

013YF：え　じゃ　そん時　乾物屋　やってたって　こと　ですか？　主に。

014SA：そー (YF：はーー) 寿司屋の、買出しは　やった。

015YF：えー。あー　そーなんですか。

016SA：さか　さか　魚をー　買って、(YF：はい) だ〈から〉　乾物屋の　方の　魚も　買ってくる。(YF：はい。へー) そーゆー　仕事　そえと、経理ね？ (YF：はい) で　後はー　遊びに　行って　芸者の　手を　握ってた。{笑い} (YF：{笑い}) ほんとなんだよー。

017YF：え　じゃー、握るのは　誰が　やってたんですか？　寿司の　方の。

018SA：うん？

019YF：職人、あのー、

020SA：そーそ、職人。

021YF：あ　そーなんですか。

022SA：それとー、あのー、まー、そ　当時　従業員だねー、(YF：はい)　従業員ぉ　小僧　っつったんだけどー、(YF：はい) それをー、あのー　ま、預かってんのがいた〈よ〉ね？　(YF：はい) で　それを、んー　仕込まなきゃいけないの。(YF：はい) だか〈ら〉、自分自身が　できないんだから、(YF：{笑い}) で、俺も　含めて　仕込んでもらおー　ともって、職人の　腕の　いーのを　頼んだの。で、計算　度外視して。(YF：はい) ある程度　ほら　そ　乾物屋　やってっからー、(YF：はい) ね？　経営としては、やっていけるからー、(YF：はい) 寿司屋だけでは、採算　取れないけども、んー　いー　職人ぉ　頼んで、そぇでやっ〈て〉たの。(YF：はーー) ところがね？そのー、そこの　その　若いしが、

〔若ー若〕

収録日時：2001年7月21日
収録場所：静かな喫茶店
話題：YAの職場→共通の友達→YAの弟→サッカー→彼女→携帯電話→新富町周辺→昔

001YC：{咳払い}
002YA：では　始めます。おねあいします。
003YC：お願いします。
004YA：言えよ。{笑い}
005YC：お願いします。
006YA：はい。カーット。
007YC：すごい。
008YA：やっぱ　こー　つけられると、(YC：うん？)｛笑いながら｝しゃべりづらいよね？（YC：ははーん）なんか　いー言って
009YC：なにを　ゆーかな　じゃー。{笑い}ださー〈だからさー〉。なんかさー｛笑いながら｝意識してないんだけどさ、意識しちゃう？
010YA：しちゃうね。
011YC：よね。自然と　意識し、してるんだもんね。
012YA：そー　しゃべりだすと　いけんだけどね（YC：そーそーそーそー）おま　ほんとに　行くのー
013YC：そーそー。{咳払い}そーだ。そっかー。
014YA：そーだねー。最近　どーよ
015YC：{笑い}知ってる。知ってる。最近　どーもこーも　ないよ、別に
016YA：えっ？｛笑い｝
017YC：｛笑いながら｝それ、終ってっからー。最近はー、んー、どーだろーね。(YA：｛笑い｝)おまえと　今まで　話した中で　一番　恥ずかしーね　これはちょっと、
018YA：うん　たぶんね
019YC：うーん。{くしゃみ×3}助け　求めてんじゃん　ちょっと
020YA：昔の　話。
021YC：あー　昔の　話ね　おれ　最近の　話終わってる｛笑いながら｝(YA：｛笑い｝)いーの？　これ　そんなんで、
022YA：いーんだよ　普通に　しゃべって
023YC：こんぐらい　ちっちゃい　声でも　もー　入ってんでしょ？　ちゃんと。
024YA：入ってるしょ。そーゆー　話題ぁ　よくないけど　普通に　しゃべってりゃいーの。{笑い}
025YC：う　うわ　ダメ出しだ。
026YA：｛笑い｝どーすか。
027YC：そっかー。{間}でも　あんま　かわんなくなっちゃった。
028YA：あん　たぶんね。
029YC：｛息を吸う｝そっかー。はっ。｛息をはく｝いーい？
030YA：いーよ。
031YC：ごめんね？｛息を吸う｝いやー、で　世田谷の　どこらへんなの？おまえ。何区なの？
032YA：｛笑いながら｝世田谷区だって
033YC：｛笑い｝世田谷区のー、なんてゆー、地名なの？
034YA：駅、阪大前だよ。
035YC：あっ　阪大前
036YA：榊原から。榊原　ってゆー　とこなんだけど、阪大前。
037YC：へー　世田谷区榊原。いちおー、きょー　泊り込みだね｛間｝そっかー。
038YA：で　あなたは？｛笑い｝
039YC：おれ？俺は、すごいよ。
040YA：｛笑いながら｝何が
041YC：すごいよ。いけいけだよ。
042YA：｛笑いながら｝なーにがだよ、(YC：｛笑い｝)そーゆーんじゃないよ。
043YC：それでも　なんか、やばいね？
044YA：何が？
045YC：ま　この年で　なにー、学生やってるの？　ってゆー　話だもん。ちょっと
046YA：ん　それは　あるね｛笑い｝
047YC：うわーっ　ろくに　専門学校も　行けなかった　奴に　言われたくないんだけどなー｛舌打ち｝
048YA：ちゃ［違う］　意味が　無いのは　行かないもん　俺。｛笑い｝楽しくないのは　行かない。

〔若ー調〕

収録日時：2001年7月20日
収録場所：公園
話題：遊び場→中学時代→新富町の名所→高校時代→趣味→水泳→虫嫌い

051YF：{笑いながら} ほかに　どんな　遊びをしてましたか？
052YA：遊びですか？
053YF：遊び。
054YA：遊びっ
055YF：どー　どーゆ　どこら辺までが、この、守備範囲、どこら辺　てゅのぁ　地域ね？
056YA：あ　地域ですかー
057YF：はい
058YA：やっぱ　銀座ですよねー　近いとこで、（YF：あー）はい
059YF：池袋とかまでは　足　のばさないですか
060YA：あ　行かないっすねー
061YF：中学生は
062YA：あのー、上野とかー　買い物とか　行きますよ、原宿とか、（YF：はー）はーい、もちろん　原宿では　カツアゲに遭いましたけどね
063YF：あ　やっぱり
064YA：はい
065YF：はー　僕も　池袋では、
066YA：で　上野では、イラク人に　迫られましたけどね、
067YF：はー　やっぱりね？
068YA：「テレカ　どーお？」って
069YF：{笑い} あ　やっぱり
070YA：{笑い} あー　今は　少ないみたいすけどね（YF：あー）やっぱ　買い物には行きますけども　遊びに　行く　ってゆー　感覚じゃないですよね
071YF：え　でも、でも　銀座、ってゅーと　遊ぶ　所　無いですよね
072YA：はい、僕ーらに　とっては、普通の　家、が　ある　とこと　一緒なんで、ぶらぶら　してるだけで　いーとか、そこら辺で　座って　しゃべってるとか、
073YF：あー　そーゆーふーな
074YA：はい（YF：はー）ドトールで、6時間耐久とか、
075YF：あー　それ　よく　やる　ことです
076YA：あー　よく　やりました〈ね〉（YF：{笑い}）6時間とか　へこみますねー（YF：{笑い}）{笑い}（YF：はーー）しょっちゅーでしたね、
077YF：え　何人ぐらい、
078YA：あ　僕たちは　いちおー、
079YF：同級生
080YA：5　6人ーで　集まってたん〈で〉すけどー、
081YF：あ　その　グルー　仲間が
082YA：グループですか
083YF：はい
084YA：はい、で　まー　他に　もちろん　合流する　時も　ありますけどね、
085YF：学年全体で、何人ぐらい　いたんですか。あの　小学校ん　時は、
086YA：しょがっこん　時はー、学年で、
087YF：学年で
088YA：学校の　半分の　二十、三　四人　いましたよ。
089YF：そのー　あれですよ。
090YA：学年ですよね？
091YF：一学年が
092YA：あ　そーです。僕ーらの　学年ぁ　二十　三　四人。
093YF：あ　そーなんですか。
094YA：でも　全校で　５４人。（YF：あらー）はぃ　僕ーたちが　最後の　卒業生なんですよ、暁しょーがっこ、
095YF：はーー、{間}{笑いながら}へーー（YA：{笑い}）え　今でも　同窓会とか　するんですか
096YA：あ　けっこー　多いですねー　小学校は、
097YF：あ　やっぱり
098YA：やっぱ　人数が　いないだけに　たぶん（YF：あー）{息を吸う}
099YF：みんな　ここら辺　住んでるんすか　今でも。
100YA：そーぇすね。大半は。